No.114(1995.12)
http://www.lib.shizuoka.ac.jp/tuusin114.html
静岡大学附属図書館報 図書館通信

ボルドー第1大学図書館事情

川　口　美　貴

私が１９９３年９月から１９９５年３月まで一年七カ月留学していたＵｎｉｖｅｒｓｉｔｅ Ｂｏｒｄｅａｕｘ Ｉは、法学部、経済学部、文学部から構成されている大学で、三学部共通の大学中央図書館の他、各学部にいくつかの分室が置かれていました。法学部には、公法図書室、私法図書室、基礎法図書室、ＥＵ法図書室と、私が研究させてもらっていた比較労働法社会保障法研究所付属の図書室がありました。

私が主として利用していたのは、比較労働法社会保障法研究所の付属図書室ですが、ここには、フランスの社会法に関する近年の主要な雑誌、判例集はもちろんのこと、ＩＬＯ、ＥＵ、ヨーロッパ諸国の雑誌もかなり揃えてあり、私にとってはなかなか便利な図書室でした。私は、図書室の合鍵を渡され、大学の建物に入れる時間帯は（平日は５時から１９時くらいまで、ただし、土曜は昼までで、日曜日、バカンス期間中は教官も含め建物自体に入ることが不可能）自由にこの図書室に出入りすることができ、かつ、この研究所のコピー機を無料で自由に使わせてもらっていたので、あまり不自由はしませんでしたが、この図書室が一般学生に開放されているのは平日三日間、いずれの日も午前か午後かの半日ずつだけなので、一般の学生には利用しにくいのではないかと思います。

公法図書室、私法図書室、基礎法図書室、ＥＵ法図書室は、そこにいる係の職員（ただし半数は学生アルバイト）に探している本あるいは雑誌を指示して持ってきてもらい、それを借りだすシステムですが、近くにコピー機がないため、山ほど雑誌をかかえて研究所まで行き、それをコピーしてまた返しにいく、ということを繰り返していました。ずいぶん不便だと思ったのですが、他の学生はあまりコピーせず、その場で雑誌を見ながら勉強し（図書室には勉強できるよう机と椅子がかなり置いてある）、必要な部分はノートしていました。ちなみに、お金がないせいか（あるいは合理的なのか）、学生があまり本を買わず、コピーもしないのに最初は驚いたものです。授業を欠席したときも、友達からノートを借り、それをコピーするのではなく書き写しているのには少しびっくりしました（その方が頭には良く入るのでしょうが）。

中央図書館は、四階建てのかなり大きな建物で、本はかなり揃っているのですが、照明が暗く（一般にフランスは照明が暗く、あれでよく眼が悪くならないものだといつも思っていました）、

夏の冷房はむろんなく(フランスでは、Ｂｏｒｄｅａｕｘのような夏は３５度をこえる暑さの地方でもクーラーはほとんど普及していません)、冬の暖房も私にはほとんどないに等しく、気候の良い時期を除いては、長時間過ごすのは難しいところでした。開架図書は、自分で自由に探すことができ、カウンターに持っていって借りることができますが、やや年代の古い雑誌等は係の職員に頼んで書庫にいって探してもらわなければなりません。昼２時間は昼休みなので、大量に本を借りてコピーしたいときは、昼休み時間にかからないよう、うまく作業手順を考える必要があります。それでも中央図書館は比較的長く(朝９時から夕方６時まで、ただし、日曜祭日、バカンス期間中は休み)開いているので助かるのですが、他の図書室は、利用時間も短く、バカンスで閉室となる期間も長く、もちろん昼休みは完全に閉まり、かつ、職員の人はいつも遅刻してくるので、私はやや、不便を感じていました。最も、お昼や夕方以降、土日祭日、バカンス期間は、勉強せず、ゆっくり休息するのが本来の生活の姿なのかもしれませんが．．。

（人文学部・社会法）

ＷＷＷの話題(専用端末５台に...ほか)

◎　利用者用にＭｏｓａｉｃ専用端末を設置して、約半年が過ぎたが、圧倒的に好評で大部分の時間、利用者が座ってマウスを動かしている状態が続いている。そこで、新たにＷＷＷ専用端末を３台。こちらは、最近急激にシェアを伸ばしているブラウザ、Ｎｅｔｓｃａｐｅを使用している。Ｍｏｓａｉｃでは表示できなかった数多くの美しいホームページを見ることができるようになった。例えば「２００１年宇宙の旅」関係のホームページなど、あまりの美しさに即座にリンクをはってしまったくらい。しばらくの間は、図書館の１番最初のページから、クリックひとつで行けるようになっているのはずなので、ぜひ見てほしい。

◎　世界各地の有象無象のホームページにリンクをはっていると、逆に当館のページにリンクをはっているところを知りたくなるのも、人情というもの。通常は、相手からメールでももらわない限り、わかることではないのだが、手はある。

世界にはありとあらゆるページにアクセスし、そのページの中身を自動的にインデックスし自分の検索システムで検索可能となるようにしているところがある。search engine と呼ばれているものである。で、当方からリンクしてほしい、という要請をしたわけでもないのに、現在、確認しているところでは、キーワードとしてshizuoka university library を使った時、InfoSeek、Inktomi、Lycos、SavvySearch、Open-Textの5つのSearch engineで当館のページが検索される。

問題は、検索結果に上がっている他所のサーバ。検索されたということは、そこのページのどこかに上の３つの単語が使われているということ。３つがてんでばらばらに存在しているのかもしれないが、ずばり当館をさしているのかもしれない。順におっていけば、当館にリンクをはっているサーバが見つかる（こともある）という次第。

四庫全書のことなど

江口尚純

中国や台湾では「四庫全書」をはじめ、古典籍、ことにその大部叢書の出版が盛んである。が書物を大切にするこの風は今に始まったことではない。中国の歴史をふりかえってみれば、古く漢代には劉向・劉歆父子による宮中の図書整理の書『別録』『七略』があり、それを受けた『漢書』芸文志、さらに以降歴代の正式な歴史書「正史」には当時宮中に伝わる図書目録を整理著録するのを常とした。その伝統の久しさには圧倒させられるものがある。歴代の王朝で書籍の校書・編纂は盛んであるが、一千巻以上の大部編纂物を挙げてみても、宋代に『太平御覧』一千巻、明代に『永楽大典』二万二八七七巻（一万一千余冊）、清朝に入って『古今図書集成』一万巻（五千余冊）など枚挙にいとまがない。因みにこの三書は類書と呼ばれるもので、「ある項目に分け、その項目のもとに古今の書籍文献を集めたもので、いわば百科全書」である。このうち『古今図書集成』一万巻は康熙帝のとき編纂され雍正帝の代に出版が完了しているが、全部銅活字による出版であり、その費用も莫大なものであったろう。

中国最後の王朝である清朝は書籍整理及び編纂の事業にことに力を用い、康熙帝・雍正帝・乾隆帝の三朝にわたって先の『古今図書集成』一万巻を始め、清朝の政事故事を記した『大清会典』全土の地理書『大清一統志』、故事典故を集めた類書『淵鑑類函』、字書『康熙字典』、韻書『佩文韻府』など皇帝の命で編纂出版された大部の書籍は多い。しかしこれらはある目的のために作られたものであり、百科全書的な類書にしてもその性質上、原文のすべてを載せるわけにもゆかず、古典籍の原書をそのまま見たいという欲求は果たされない。そこで古今の有益な書籍をもとのままの姿で網羅した一大叢書が企画されることになった。「四庫全書」である。

「四庫全書」の編纂は乾隆帝の勅命により始まるが、まずなされるのが訪書すなわち書物を集めることである。今「四庫全書」が底本としたものを見ると次の六つに分類できる。①勅撰本（歴代諸帝の撰述）、②内府蔵本（従来より宮廷に収蔵したもの）、③永楽大典本（永楽大典より鈔出したもの）、④各省採進本（各省から進呈されたもの）、⑤私人進献本（個人から進献されたもの）、⑥通行本（一般に出版流通しているもの）。特に進献本を受けると副本を精写して各書の篇首に「恭読」「翰林院」の印を押して記念とし、それぞれ進献した者に贈ったという。こうしてあつめられた書は一万余種十七万余巻にのぼった。このうち有益な書籍三千四百余種約八万巻を集成したのが「四庫全書」である。「四庫全書」に収録されなかったものは「存目」といい、書名のみを残した。この「四庫全書」と「存目」には時の学者の解題がそれぞれ付けられて、『四庫全書総目提要（略して四庫提要という）』と呼ばれて、現在でも書物研究の基礎資料として学者を益している。

こうして編纂された「四庫全書」は十余年の歳月を経てまず宮廷四庫の謄写が出来上がる。すなわち畢世の大叢書であるから出版には及ばず、まず開花榜紙という美麗な紙に四セット筆写さ

せ、それを宮中の文華殿の裏にある文淵閣、奉天行宮にある文溯閣、熱河の避暑山荘にある文津閣、北京郊外の円明園にある文源閣に分置した。のち江浙三閣（文匯閣、文宗閣、文瀾閣）の三部を加えたが、この間、浄書生一〇〇〇名を使い、毎月四〇〇〇冊を浄書させたというから、気の遠くなるような作業である。このうち円明園にある文源閣に所蔵された一部は咸豊十年（１８６０）英仏連合軍の円明園焼き討ちの時に恢燼に帰し、このことは映画「西太后」の中でも描かれている。他にも太平天国の乱など戦乱で焼失したものも多く、現在では文淵閣本（今は台湾の故宮にあり近年出版された）、文津閣本（今は北京図書館にあるという）、文溯閣本の三部が伝わるという（文瀾閣本は焼失ののち浙江図書館に補修収蔵されている）。

中国文化の精華ともいうべき「四庫全書」の顛末はこのようである。使用の底本には問題のあるものも多いが、現在では「四庫全書」にしか収載されていない書籍も多く、その意味は今なお失われていない。往年の「四庫全書」刊行を知った時は驚嘆したものであるが、最近の広告に、中国での「四庫全書存目叢書」約四千種六万巻（約千二百冊）という途方もない叢書の出版予告を見付け、しかも中国・台湾のみならず、欧米や日本の研究機関に所蔵される天下の孤本を多数含むという。彼此の書物に対する思い入れの違いをまじまじと感じさせられると共に、この世紀の大出版が無事完遂され、研究者を益する日の近からんことを祈ってやまない。

（教育学部・漢文学）

平成７年度大学図書館職員長期研修報告

情報サービス課運用係　藤田　洋

学術情報に関する最新の知識を教授、職員の資質と能力の向上を図り、大学図書館の情報サービス体制の充実の促進を目的とした、平成７年度大学図書館職員長期研修が、７月１０日(月)から７月２８日(金)まで、筑波学園都市に所在する図書館情報大学を主会場として開催された。全国の国公私立の大学図書館の中堅職員(係長中心)を対象に、主催は文部省及び図書館情報大学の共同で。内容はおおきくわけて次の３点、大学で図書館情報学の教鞭をとっておられる先生方の理論を中心とした講義、及び大学図書館の部課長を中心とする講師陣による実務的な講義及びさまざまな機器を使った演習を中心とする他、参加者の主題別グループ討議と最終日における発表などがあり、その間国立国会図書館始め大学･研究機関等の見学も多く行われた。以下はその研修に参加した私の報告ならびに感想である。

「朱夏の会」で、また会いましょう。あの暑い七月から、もう４ケ月が過ぎようとしているが、研修の最終日、これを機に親睦と情報交換を続けていくことを主旨に全会一致で同窓会の設立と正式名称が決まった。大学図書館職員として、３週間同じ講義を受け、いくつかの図書館を見てまわり、熱心に議論したことは私にとって貴重な体験となった。見学の対象となった大学等には、

４０余名の集団がゾロゾロ職場の中を徘徊し、さぞ仕事の集中を妨げたのではないかと気がかりであるが、われわれにはたいへん得がたい機会とばかり、図書館の仕組みのちがい、蔵書の特徴、働く人たちの様子や利用者の反応などを観察するのに夢中であった。東京の山の手線内の大学及び研究機関に、現地集合・現地解散が含まれる今回の研修は、私のように普段、電車の混雑やラッシュの経験のない者には、なかなかしんどい日程であった。後半、会場がつくば地区に限定されてからは、東京の雑踏をはなれた分、大学学園都市が緑に恵まれた静かな環境に感じられ、研修内容に一段と身が入ってきた。筑波大学附属図書館においては、早朝、「シェルフ・リーディングの時間です。」というアナウンスにより一斉に、職員全員が書棚の乱れを直すという日課には感心した。さらに、一般市民のボランティアによる図書館業務への積極的採用という先進的試みを始めたとのことを聴いたが、その目的が図書館職員の人手不足を補うためのものではなく、一般市民の大学図書館の利用を促すことにあると聴き、二重に驚かされた。ほぼ後半の会場となった雰囲気のよい図書館情報大学の中での同僚とのディスカッションは大変活発になり、内容も充実してきたので、もう一週間あってもよいと思った位であった。

さて、研修で学んだ中には、いくつかの演習について印象の深いものがある。たとえば、電子メールの利用を具体的に端末操作で指導を受けたが随分おもしろいものであると、感じた。第３週のある講習では、論文をいくつかのキーワードによって限定抽出していく演習で、私は思い付くままdiscriminationとsexを入れてみたが抽出論文が多すぎ、もう一つdivorceという単語をいれ、絞り込んでいった。この演習では、極めて無数にある論文から自分の求めるテーマに近いものをいくつか選択して研究の参考とする状況を設定していくのが狙いである。実際の演習では、簡単な端末の操作の説明後いきなり各自が試してみることとなったが、その際英語の単語の運用力と正確な綴りの知識が必須なので、普段から英語力の向上に努める必要性を痛感した。

カール・ベッカー先生(日本語による講義)の話の中に、インターネットの普及が進むと、ＣＤ・ＲＯＭは、あまり役にたたない時代が来るというのがあった。同じ研修の中には、ＣＤ・ＲＯＭの使い方に慣れようという演習があり、一方では今学習している知識がいずれあまり役にたたなくなるといわれているようで、時の流れは思っている以上に速いなあと考えさせられた。電子図書館の時代になると当然、今の図書館の職場は変質して行くと思われる。(「もしかして、図書館そのものが無くなってしまうのでは」、という危惧を実際研修中に講師に向けた人もいた。)どうなってしまうのだろう、などと他人ごとのように少なくとも図書館に勤める私は言ってはいられない。

国立国会図書館の資料保存課の見学で、どちらかといえば、仕事そのものが職人的といった内容であり、文化を保存するのだといった誇りと固い信念が感じられ、対象が特殊な分野のものとはいえ、同じ本を扱う職場のなかにはこういう所もあるのかと見聞を深めたように感じた。必ずしも納本制度というものがあるだけではない、静岡大学の図書館などとはちがっている事情もあるようで、もう少し詳しく見学・話等できたらなあ、と思ったのは、研修ちょうど半ばの頃のことであった。

図書館建築に関して、阪神大震災での神戸大学図書館のなまなましい実例を挙げ、例えば書庫内の安全管理は．．．というような、興味深い講義もあった。また、灰色文献と呼ばれものを苦労して集めている団体が存在して、そういう資料はどこからどうやって収集し、どう役に立っているか．．．というような９０分では、少しものたりないような講義もあった。いずれにしても、

３週間きわめて内容の豊富な研修を、後に「朱夏の会」と名付けられることなるほどの酷暑、幾分頭がパンクしそうになりながら閉講式の日は訪れた。この間に得た知識・体験は今後の私にとって貴重な財産となるであろう。

＝＝＝

浜松分館の未来予測

====== ２つのグラフから ======

管理運用係長　塚　本　雅　美

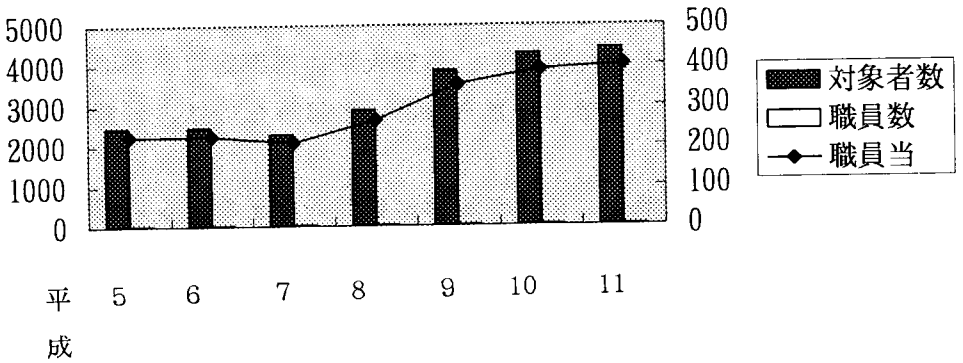
２つグラフをご覧いただきたい．図１は西部キャンパスの利用対象者数について職員1名当りの人数の推移を予測したものであり、図２は浜松分館における資料の収納可能冊数の推移を予測したものである．この予測及び試算については、現在のところ不確定な要素が多く、あくまでも現時点での予測であることをはじめにご了承願いたい．なお、それぞれの数字についての解説は主要なものにとどめる．

不正確なデータとなるのを承知で作成したのは、大学の再編成の中で浜松分館をめぐる状況がどう変化するのかを大ざっぱにでもつかみ、できるだけの対処をしていく必要があったからである．

まずは、図1であるが、職員数（非常勤・パートを含む）が現在のままであった場合、職員1人当りの利用対象者数は一体どのくらいになるのかを調査したものである．奉仕対象者数とは、西部地区の教職員及び学部学生・院生を意味し、サービスをしなければならない人数である。

図１　職員一人当り利用対象数

	平成５	平成６	平成７	平成８	平成９	平成10	平成11
対象者数	2468	2468	2289	2900	3884	4287	4421
職員数	11	11	11	11	11	11	11
職員当	224	224	208	264	353	390	402

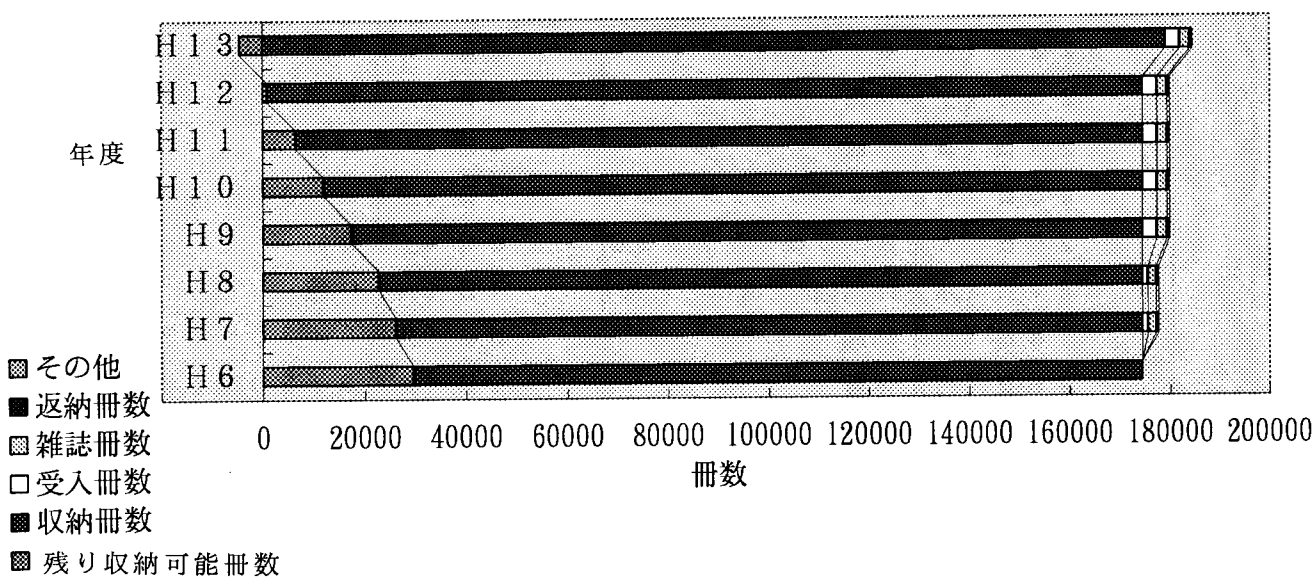


平成６年度では、2468人であったが、今後、工学部及び情報学部が浜松地区での4年一貫教育が実現した場合には、約4420人と予想される．現在、3～4年学部生だけなので、1～4年となると単純に2倍となることが予想されるが、予測でもそのように試算された．

奉仕対象者数の増加は、図書館における条件が現在と全く同じだとしたら、どんな障害が発生するのだろうか．身近なところでは、館内のサービススペースの不足、閲覧座席数の不足などが上げられる．資料面では、教養科目関連を中心に人文社会科学系の資料が不足すると思われる．ちなみに現在の浜松分館の所蔵図書の分野別比率は、理工学系が80%、その他が20%となっている．図書の受入・整理といった図書館事務処理量も増加するであろうし、窓口対応を中心としたサービス業務、例えば貸出、文献複写、相互貸借、受入した資料の管理、など業務量も増加することが当然ながら考えられる。

図２　収納冊数予測

年度	全収納冊数	収納冊数	受入冊数	雑誌冊数	予想返納冊数	予想増加冊数	残り収納可能冊数
平 6	174,475	149,975					29,500
7	174,475	148,318	1,137	1,705	501	3,343	26,157
8	174,475	151,661	1,137	1,705	501	3,343	22,814
9	174,475	157,141	2,866	2,113	501	5,480	17,334
10	174,475	162,621	2,866	2,113	501	5,480	11,854
11	174,475	168,101	2,886	2,113	501	5,480	6,374
12	174,475	173,581	2,886	2,113	501	5,480	894
13	174,475	179,061	2,886	2,113	501	5,480	- 4,586



現在、浜松分館の資料収容能力は、約17万4千冊であり、その内空き書架となっていて収納可能な冊数は約2万9千冊である．図２は、増加するであろう図書館資料の収納について予測したもので、設置書架が現在のままの場合、一体どのくらいの資料が収納可能となるのか、また、何年後に収納不可能となるのかを試算したものである．受入冊数は本館の受入冊数から奉仕対象者1人当りの受入冊数を算出し、これに浜松分館において増加するであろう奉仕対象者数を乗じ現在の受入冊数に加算した．なお、その中で図書館配架とならず研究室貸出しとなるものを半分と見

積もった.平成９年度から2866冊とした．また雑誌も書架に配架する必要がありその分を見込んだ．雑誌を製本した場合の図書冊数として換算してある．平成９年度から2113冊とした．さらに、書架に配架される資料として研究室から返納される資料を考慮にいれる必要があり、過去３年分の平均から501冊と見込んだ．実際はもう少し多くなるはずである．これらが毎年書架を埋めていくとすると、平成13年には書架上に収まりきらなくなるという予測となった．

その他の要素として、工業短期大学部旧蔵書は現在工業短期大学部図書室に配架され利用されているが、図書館へ配置を換えるとすればさらに書架が満杯になる年限は短くなる．また、情報学部新設に伴い学生用図書等を購入配架する、あるいは、本館から教養課程のための図書を移動するといったことがあれば、さらに短くなる．

2つの図から、浜松分館で対応すべき事項が少しでも明らかになってくるのではないだろうか．1つは、施設面の充実がどうしても必要になること、もう１つは増加する業務にどのように対応するか、である．当然ながら、こうした課題の基本的な解決法はヒトとカネということになってしまうが、今後早急に検討すべき課題も多くあり、積極的に取り組んで、最終的には利用者へのサービスの充実に結びつくようになればと願う次第である．

◎　冬季休業中（１２月２１日から１月１０日まで）、休館日、閉館時刻が以下のとおりに変更となります。

	開館時間等		開館時間等
１２月２１日（木）	８：３０～１７：００	１月　１日（月）	休館
２２日（金）	８：３０～１７：００	２日（火）	休館
２３日（土）	休館	３日（水）	休館
２４日（日）	休館	４日（木）	休館
２５日（月）	８：３０～１７：００	５日（金）	８：３０～１７：００
２６日（火）	８：３０～１７：００	６日（土）	休館
２７日（水）	休館(館内清掃のため)	７日（日）	休館
２８日（木）	休館	８日（月）	８：３０～１７：００
２９日（金）	休館	９日（火）	８：３０～１７：００
３０日（土）	休館	１０日（水）	８：３０～１７：００
３１日（日）	休館	※１月１１日以降は平常どおり	

◎貸出図書の返却期限日の変更

１２月１日（金）から１月１０日（水）までに貸出した図書の返却期限は、１月１８日（木）となります。

静岡大学附属図書館報「図書館通信」　第２６巻３号(通巻１１４号)　１９９５年１２月２０日
発行所　静岡大学附属図書館　〒422 静岡市大谷836 ☎054(237)1111 FAX 054(237)9580
印刷所　(株)黒船印刷　e-mail bsnmoti@ipcs.shizuoka.ac.jp